

Shinsei

真生



第十卷 十一月號

(大正十四年八月十三日)
第三種郵便物認可
昭和七年十一月一日印刷納本
昭和七年十二月一日發行
每月一回一日發行
第十一卷第十號

目次

口繪解説……………善之進
 法華教を通 浄土教……………土屋観道
 じて見た 早くお歸りなさい…尅 子
 悦 び……………尅 子
 信仰の實話……………高島康夫
 永生と無限の向上を望む
 古今十方の衆生より長圓寺住
 藤村長四郎
 小さな事乍ら……………神谷善之進
 三吉の氣晴らし帳より
 三 吉
 眞生同盟秋季大會御案内
 ひ か り
 柏日談窓……………柏崎日報
 吾朋便り

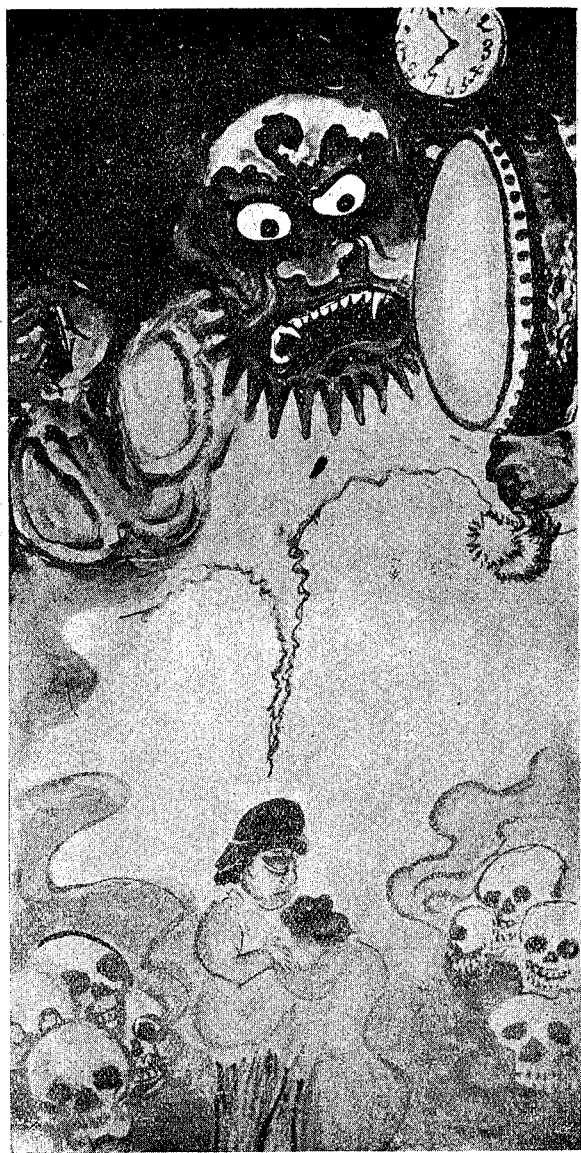
口繪解説

善之進

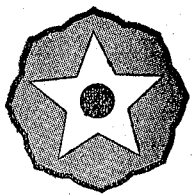
此繪は土屋先生の御講演を拜聴中今日の心裡に繪となり彷彿と浮びしものを筆にせしもの。

曇雲の効積み、最高の學府を出し青年、豫て出せし博士論文も認めらるゝ所となり芽自度、博士の稱號を得、此の喜びを最愛の戀人に告げ相抱きて觀喜の頂上にある時、突然天の一角より大音あり「汝の命數將に終らん、時刻は十二時、ドーンと大鼓の鳴る時なり」云、

青年驚きて時計を見れば十一時を指す刻々として迫る死の時刻！……青年の悲痛やる方なし、かゝる事を未だ知らざる相思の娘、戀人の如く前途に胸躍らせ、晴れて結ばん時こそ來れり、親の許しも得たるものを告ぐれど青年黙して不語、我が命もあと寸刻、五十分——三十分——名譽の博士號も何かあらん、幾百萬の遺産も、想思の戀人も亦何かあらん、吾生過てりよ漸く目覺むれど時すでに遅し、——あゝ二十分——十分——五分——私は思ふ。「人生須らく死の面を見直してから出直せ」云金も名譽も戀も、死の前には層反古に過ぎない、死して悔ひなき生とは何ぞや、死も怖れなき生とは何ぞや、ドーンの鳴る時は何人も逃れられざる也畫中下部に畫きし多くのドクロはザラに轉るゝこの層反古の人生の末路を表現せしもの。



神谷善之進筆



法華經を通
じて見た

浄土教

土屋觀道

一、序

私の信仰はどちらかと云へば念仏宗であり、従つて浄土教的であります。今日のところ、之を打ち明けて云へば非常に法華經の思想影響を受けてゐることを否むわけには行きません。そしてまた、今日の社會にあつてはさうあつてこそ、始めて本當の浄土教がこゝに完成するのではないかと思ふのであります。

最も嚴密に云へば浄土教の發達は單に法華思想の影響ばかりでなく、或は華嚴思想や眞言思想なども多分に影響してゐると云ふことは云ふまでもないことであります。今はたと表題の様な意味に於て問題の範圍を限定するのであります。

二、經典成立の年代と順序

私共の小さい時の考へはお經と云ふものは釋尊の説かれたものだと聞かされて、お經と云ふものはその經典の全部が釋尊の説かれたものと思つてゐたのであります。然るに今日から考へると其の考へ

は全く間違つた考へでありました。そんな經典は今日の所一部としてないのであります。つまり、現存する今日の經典は釋尊の滅後何十年若しくは何百年の後に釋尊以外の誰人かによつて述べられたものであつて、而も大乘經典とも云はれる佛典の多くは佛滅を去ること甚だ遠い後代の作であります。乍然それだからと云つて、それが釋尊の眞意でないと思ふのは誤りであつて、寧ろ釋尊の眞意は此の後代のものによつて、顯はれたと云ふのが本當であります。従つて、佛教思想の發達の上にも各々その思想の流れが相反したり、又相一致したりして、相互に影響したものが多いためであります。

三、法華經以來の淨土教

此の意味に於て、私は未だ法華經を知らない以前の淨土教があるとすれば、それは法華經に比べて確かに一段の劣りを見るのではないかと思ふのであります。何となればそれらの淨土教は法華經に比べて、所謂爾前の教となるからであります。従つて、若し此の淨土教を法華經に比ぶれば、淨土教の阿彌陀佛は此の土以外の他方土、即ち西方の淨土に在しますに對して、法華經の釋尊は此の土に在しまして、常住に說法し給ふのであります。私共は眞に打ち明けたところ、此の土を厭ふて西方を願ふて居るであらうか。同じくこちらに於ても救いが得られ、又同じく解脱が得られるものならば此の土を厭ふて西方に往くよりも、此の土に於て眞に救はれるのが勝ではないか。即ち未來主義より現實主義が人生の本質である。次に宗教の本尊としても、淨土教の阿彌陀佛は一法藏菩薩が修行の結果佛となつたものであるが、而もその佛は諸佛の中の一佛に過ぎぬに對して、法華經の中の釋尊は私共に對しては諸佛の中の根本佛であり、又此の土に於ける私共は其の佛の子であると宜べられてゐる。此の點また法華經が從來の淨土教に勝る點であります。

此の他、彌陀の淨土は十惡五逆の衆生の生れる所、従つていかに罪惡生死の凡夫も稱名口稱の一行で容易く往生のできると云ふが、此の點また法華經には、口稱題目の中に凡夫成佛の眞意が容易に發見せられ、題目を以つて不可とするならば南無佛の稱名また必ずしも念佛稱名に劣るものではないのであります。

此の點果して、法華經の思想が淨土教の教へに劣ると云へるであらうか。寧ろ法華經の思想は此の淨土教の思想を悉く吸收して、更に一步を此土成佛と佛子の自覺の上に進めてゐると云ふべきであります。従つて此の意味から云へば淨土教の思想は法華經に一步をゆづつてゐる。

四、法華以後の淨土教

然らば眞實の淨土教が此の世に存する限り、それは此の法華經を通じて見たる淨土教であらねばならぬ。此の意味に於て、私は法華經以前の淨土教に對して、此の淨土教を法華經以後の淨土教と云つて居ります。其の意は今後の淨土教は法華經の思想を通じて見たる淨土教であつて法華經の後に現れて來るものでなくてはならぬと云ふ意味であります。

然らば其の淨土教とはどう云ふ意味の淨土教でありませう。それは云ふまでもなく、此土と彼土との意味の見直しがその一つであります。言いかへれば淨土教に云ふ此土とは凡夫の暗の生活を云い、彼土と云ふは阿彌陀佛の解脱の境界を云ふのであります。従つて、それは必ずしも、普通俗人の考へてゐるやうな此土とか彼土とかの區別ではない。即ち信仰なき人の心の世界は何等の光明も照さぬ闇の世界であつて之を凡夫の此土と云ふ此の凡夫の世界から如來の世界、光明の世界を指して、彼岸即ち彼土と云ふに過ぎない。

次に私共の云ふ阿彌陀佛は報身報土の阿彌陀佛それはいはゆる法華經で云ふ、本門の釋迦その人でありませう。従つて諸佛の一佛でなくして諸佛の中の本佛であります。(一九三二、一〇、一五)。



早くお帰りなさい

尅子

娘さんが今晚もお話を聞きに来てゐる、而しどうも心から落付いて聞いてゐられぬ。聞いてはゐるものゝ、どうも私の話が一つ／＼スー／＼と弓の矢が的へさゝるるように、胸の中へ這入つて行かぬらしい。私は變だと思つて聞いてみた――

「今晚は、どうも、あなた落付いて居られぬようですネ……」

「ハイ……」

「どうかしたのですか……」

「どうしたのです……」

「ハイ、今晚はお母さんが行くなど云はれたが、来たくて無理に出て来たモンですから」

「そうですか、よく出てゐらしやつた。而し出て来て也十分話は聞けたから今から、早速家へ歸つて、お母さんを喜ばして上げなさい――」

「ハイ、そう云つて頂くと歸れるように思ひます。居つても居ならぬし、歸るのも何も聞かずに歸るのでは惜しいような氣もするし、もぢ／＼してゐるだけで本當に困つて居りました。これで歸つていゝでせうか」

「あなたは、出てゐらした丈で、話以上のものをシツカリ掴みなしたのです。もうココで聞いてゐるより、家へ歸つてお仕事を上げて下さい。それが活きた聽法です、活きたお念佛です。死んだ信仰や、死んだ悦びを掴みなさるなよ……」

いそ／＼と歸つて行く、その娘さんの後姿を見て私はうれしかった。

悦び

尅子

信仰の友達同志は、カラダの達者なだけ位いを見て、「あなたもお達者で結構です……」と、喜び合ふ位いではもの足らぬ。

一緒にお念佛し、一緒に法の話語り交はして見て、お互に道を求むる心の上に、少しも緩みなく、ます／＼真劍であつて、暫らく會はぬ間に信念も一層と鋭練せられ生活にも一層充實味を帯びて来たことを知り合つてこそ、初めてあなたもます／＼御精進で結構です……」と悦び合つていゝと思ひます。

私は、三河の舉母で、三四年遇はなかつた舊い信仰のお友達にお會ひして、お顔を見た時非常にうれしかった。家庭の色々なこみ入つた事情で惱んでみえるといふ事を聞いて、蔭ながら心配してゐたが、ココまで出て來られるようでは、矢張り求道のお志があるからいゝと安心してました。而も一緒にお念佛してみると、その張りのある聲、凜とした意氣込みが、邊りを拂つて響きわたります。一層信念、生活の上に鍛へられて來られた點がハッキリと感取されます。私は涙が出るほどうれしかった。そして私自身も、其真劍さに打たれて、身心共に洗はれたように感じました。信仰の徳の偉大なることを今更ら乍ら感じた譯であります。

死ぬるかと思つたら生きた話

高島康夫

丁度私が大正十五年の秋、南洋行きの仕事をやりました。大

阪から五十噸ばかりの補助帆船で出かけました。その時、四、五

十噸の船で南洋迄行く云ふことは危険でしたから、支出關係

からもやめたからうさ、色々せめられました。

けれ共行きたい一心でなつた私は、「ナニやらうと思へばや

れんことはないから」と云ふので、到頭出發したのであります。

九州から臺灣に向けて、一直線に行きました。丁度臺灣と九

州の真中で、その船が火災を起しました。朝五時頃でした。

私はベツトの上起きてゐた。さうすると、コック部屋で「火

が出た、火事だ」と誰か叫びました。テツキには南洋へ行つ

て歸つて来る迄の石油が、二千貫ばかり積んでありました。

火の元は石油タンクの兩側で、石油タンクの側が炊事場にな

つてをりました。その中から火が出たんです。その時には、も

う火がテツキの下を廻つてゐる。石油タンクに付いたら大變だ

と思つて、船員一同に「起きよ」と叫んでおいて、テツキの上

に上つて見ました。所がこれは逆もいかんと思つたから、「皆テ

ツキを破壊せよ」と、テツキの破壊を命じました。

そこで一同が、一生懸命になつてテツキの破壊にかかりまし

たが、仲々破壊が出来ません。

その時、私は妙な考へを持ちました。テツキには石油が二千

貫積んである、若し火を消せなかつたら、吾々は石油の火と共に

死ぬる、船と共に沈んでしまふ、死ぬにしても、自分は取亂

した死方をしたくない、そこで坐つてをれば、こけることはない

だらう、坐禪して柱に凭れてをれば假令焼けても、こけること

はないだらうと思つてその通り坐りました。

その瞬間でした。急に考へが變つて、最後迄やつてからでも

遅くはないと思つて、走つて行つてテツキを破壊してゐるのを

手傳つてやりました。その時は、もう夢中でした。一生懸命や

つてゐるさ、到々破壊が出来ました。さうすると、丁度い、具

たが、仲々破壊が出来ません。

その時、私は妙な考へを持ちました。テツキには石油が二千

貫積んである、若し火を消せなかつたら、吾々は石油の火と共に

死ぬる、船と共に沈んでしまふ、死ぬにしても、自分は取亂

した死方をしたくない、そこで坐つてをれば、こけることはない

だらう、坐禪して柱に凭れてをれば假令焼けても、こけること

はないだらうと思つてその通り坐りました。

その瞬間でした。急に考へが變つて、最後迄やつてからでも

遅くはないと思つて、走つて行つてテツキを破壊してゐるのを

手傳つてやりました。その時は、もう夢中でした。一生懸命や

つてゐるさ、到々破壊が出来ました。さうすると、丁度い、具

合に、火が破壊したテツキの上によつて来た爲、消火が出来た

のです。それで漸く助かりました。

その時は泌々有難いと、お念佛して哭いた事ではありますが、

それから如來の光明は、或る場合には自分にまつて最も良い働

きを即座に教へて下さる、それが如來の光明であると思ひまし

た。

永生と無限の向上を望む

三重縣飯南郡大石第二校 藤村長四郎

佐賀藩武士道の經典と算ばれる『葉がくれ集』に「人は立ち

あがるこころなければ物にならず、人より頭を踏まれグツグ

として一生を果すは口惜しき事なり。まこと夢の閑なる世なら

ばハツキリして死に度きこそぞかし」と、又百人一首に入道

我身なりけり」と。私達は決して嵐に誘はれて降りゆくものは

雪さばかり思つてはなりません。人を散り行くのだ、人生に課

せられたるものは、老ひであり死の旅路であります。無常の風

は時を嫌ひません。来る日も又次の日も無自覺な灰色の生活を

繰り返へしてゐる間に日は移り人は老ひ行き死んで行くのです

三度の食事と寝る事と娯樂の爲に一日の半分以上も費して、こ

れは繰り返へしをしてゐる間にさうして人間らしく立ち上る事

が出来ませう。大聖孔子ですら終日食はず、終日寝れずして想

ふ」さ、あゝ！私達は何さみじめな生活でせう！何と空虚

己が宇宙の大生命に信仰し小宇宙なる自覺のまことに無我の大

人格、佛の人格、自覺他覺行具備の人格であつて宇宙平等の

人格にまでの向上をたゞひたふるに望み行するの生活であり度

い。この行として現實を眞に生かす宗教は私共が心の糧となり

行の規範となり道徳の原理根本となる『眞生宗教』の外にはあ

り得ない永遠に生き無限に向上せんと信仰し行する土屋觀道先

生の『眞生』に勝る眞實の道なひたすに求むる宗教はないと

確信する。始めの頃は先生を疑ひ、眞生主義を理論宗教と誤解し

たる時代は何時か先生を疑ひ、眞生主義を理論宗教と誤解し

生行に生かして下さつた谷口年泰、春沙、觀雅、及び村木弘見其

の他の加次者、信仰者の日常の生活に感化され、或は從兄に當

指導、至らぬ無信仰な私に不知不識の間に逃れる御慈悲ある御

助君さば違ふ度びに自己の缺點を披瀝して眞實の道に導かれ

間の少い時二人でありました。土屋先生に直接お逢ひ出来る機

會の少い時二人でありました。土屋先生に直接お逢ひ出来る機

古今十方の衆生より(續前)

大阪 長圓寺住

つくづくおもしろくらしきいりあひのかれのひゞきに彌陀ぞこひしきわれなくば誰もこゝろをひさむきに彌陀をたのみて後生たすかれ法の道たふさきこゝはつきせればいそぎむかへよ彌陀の淨土へ彌陀たのみひこのれざめはほまゝさすわが名さなるあけぼのゝそら阿彌陀佛さなりしほさのけすがたこそわが往生のしるしなりけり南無と云ふ二字のうちにはおのづから彌陀をたのまんこゝろあるべし彌陀をたのむこゝろのはじめより我とおこらぬこゝろさぞしれ彌陀の名をきゝうるこゝろあるならば南無阿彌陀佛さたのめみな人みな人に彌陀をたのめさゆふなみの河をさたてゝみゆる大さか

以下次號

○懸崖

懸崖の菊がもち出されました上へ伸びたり、下へ伸びたものゝみが珍重されるかと思ふと、そうではなくて、横へでも徹底的に伸びたものなら、もうコンナに尊はれてゐることを知りました。

○おかま

毎日、尻から焙られながらも、忠實に御飯をたき上げて、眞黒な顔をしてゐるお釜さんは、世界に於ける一番の勤勉家、一番の働き手の御手本かも知れません。そして何代も何代も、家の主人につかへて、その家を興へす。いくら貧乏してもお釜まで賣る人は少い。いくら質屋へ入れてもお釜さん丈けは一番早く受け出し升。それを見ると前後しての主人への忠勤者であるらしい。一つ、大きな人間ズラをして居らずにお釜ズラになりませう。

小さな事件ら

今年の夏、宅の小供が縁日の夜店で轡虫を買つて来た。「ガチャガチャ」と毎ばん盛んに鳴いた、勢よく歌つてくれた。或晩のこと一向に歌はないどうした事かと、よく見れば是はどうだ。昨夜鼠の爲に一疋は喰れてしまひ喰殘されし一疋が幾本も足を喰はれて半死半生のさまである。満足な足は一本、半分斗りになつた足が一本になつて倒れて居るではないか、食物を興へればしきりと喰べる、捨てるにも捨てられず、其まゝにして毎日あたらしい野菜を興へて居つた、幾日かを過した後、食はれて半分になつた足は傷口から腐りがはいて来た残れる只一本の足さへ傷がついて居たと見えて腐りかゝつて来たではないか。今は全く勢力も抜け果て、緑の艶のよかつた羽色がだん／＼黄ばんで来た見るからに憐れである。日に、日に秋の冷氣は加はり横に倒れたまゝとなつて居る。今や將に死の到るを持つのみとなつて居る、愈々かはいさうになつて毎日毎夜青菜生瓜等を興へると、其切口から出る所の青物の汁をさも甘さうに吸ふさまが中々眞剣だ。嗚呼彼も死にたくないのだ、生きたいのである

神谷善之進

る。それから毎朝々々もう死んだか、まだ死なぬかとて幾日も過ぎた。然るに或夜中のあけがた近い頃突然「ガチャガチャ」と鳴くではないか、をやまだ生きて居るなと驚いた、それから又一層に憐になつて精出して食物を興へた、すると少しづつ、天氣さへ加はつて来た。けれども秋も追々深くなつて早や十月十日、前途知るべきの命なればこそ、見るも涙の種、因縁なればこそ、運命なればこそ。かゝる小さい虫一疋にさへ大きな如來さまの御力が働きかけて居てくださるではないか。此の小虫自らも全力を擧げて生んとしての活動をして居る。

私自身も、近來目の悪さも進み又少しの勞務にさへ勞れを覺ゆるやうになつた、けれども少し體力の弱つた位何だ、まだ目も潰れたといふではなく少しの不自由位い何だ、虫に負けないやうに精一ぱいやれ／＼と心の奥で叫ぶものがある。出来るだけやつてのけやう、死ぬるまであたえられたるいきのまに／＼。

鳴虫の聲きくたびに思ふかな、をらもをまへもうろの身なれば



御嶽登山
這松の尾根に白衣の懺悔かな

名古屋 中川天静

眞生歌(歌曲は號前)

上林温泉にて
山の温泉に唯見る雲の去來かな

東京 山田峰子

吾を繞るものゝすべてに恵まれし吾をみつめて泪こぼるゝ。
此一日つとめ終りて合掌すみおやの前にやすらひし心。

名古屋 尾上ぎん

にこりなき君の心を御佛の法の光に晴し嬉し
あめもふれ風もふくらむ世にたのむはみたの力あるのみ

名古屋 中川五十子

むつまじき友と浮れて友とへは人のうわさに心くもれり
訪れて嬉しき友のなきけにて曇る心も彌陀の慈悲なり

父上に
東東 土屋美智子

父上の教へまもりて眞生の道はがらかに吾れ歩むなり
二階佛間の如來様を拜して

かぎりなき慈悲にあふれしおん顔みればなんともなしにかし
らさがるなり

立てよ立て立て
 (一) 取れよこれ取上げよ
 おのがスキヲ取り上げよ
 勇み動らく喜びの
 内に幸ひかゝやかん
 内に幸ひ輝かん
 行けよ行け行け進め
 (二) おのが理想につき進め
 行く手さまたく障碍も
 忽ちおのづみ消え失せん
 忽ちおのづみ消え失せん
 活きよ活き活き活き上がれ
 (三) おのが使命に生き上がれ
 死して悔ひなき聖業に
 我が一生を果しなん
 わが一生を果しなん
 菫子作

柏日
談窓

眞生運動の轉向

昭和七年九月九日

この記事は去る九月土屋先生が柏崎へおいでになつた時柏崎日報に掲載されたものであります。

光明眞生會の導師土屋親道師は福岡縣の産と云ふ。談窓子の出身地とせばすぐ隣合である。でなくとも土屋師は非常に人懐こい。温かみのある方なので、時偶會つた場合に遠慮なく接することが出来るので眞生會同人としては落第生の談窓子も師に對する親しみは人並に感じて居る。

土屋師は極めて眞剣な方である。それだけに土屋師の今後には、今一段の外面的變化があるであらうそれは從來師の爲された講演中にも、その片鱗を既に現して居たものである。

一兩日前寄贈された九月號「眞生」の表紙繪は、シャベルを握つて今にも土をばれ起さんとする男壯なる青年の姿である。土屋の眞面目は正に此處にあるであらふ。此の眞行運動にあるであらふ。殿堂より街頭へ、それが土屋師の眞面目であらふと私は願て居る。

同誌に掲げられた「眞生會の夕(三)」に、土屋師が、僧服に對する自分の氣持の變化を語つてゐる。さうして、その最後に「そこで承年やつて来た今までの生活様式を捨て、己むを得ない場合の外は成可く僧服をつけなさいことにしたのです」と言つてゐる。私の觀る處では此氣持が今一轉化しはしないであらふ

か。さうした時にこそ土屋師が土屋氏としてほんまうにきまるのではなからふかと思はれるのである。

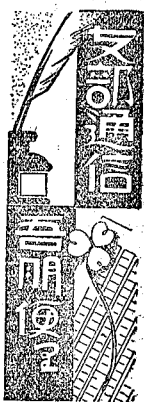
土屋師のお別時念佛が廢止されて、師の頂天立地、その全身全靈が念佛となり切つた時、その時こそ、土屋師が土屋氏として眞に生きるのではなからふか。

土屋師は、今や燃ゆるやうな熱を以て眞行運動に向かつて「進め！進め！」の號令をかけて居る。既に眞生の徽章も出て居る。九月號眞生の裏表紙に掲げられてある文句は實に眞行運動への進軍喇叭である。

「私達の運動も、うつかりすると遅れます」と警告し「願はくば全國の同誌よ。一刻も早く吾々はお互ひに提携して立ちませう。身命を屠れば何事かならざらん一切は眞行の世界であります」と激勵してゐる「昔から今日まで多くの歴史を繕きますと良かれあしかれ歴史は一として此の努力からなされないのであります。やつても死に、やらんでも死ぬ人生でありす。何れ死ぬものならば本當の事を仕やうではありませんか」と覺悟を促してゐる。

更に又「金と名譽と色慾と、食ふことの外に望みのない人はど仕やうのない人はありません。願はくば如來を中心とする眞人の同志が欲しいものです」と希望を述べてゐる。

斯くて最後に「願はくば全國の同志よ！共に價値ある生活に立たうではありませんか。それには何よりも各自が人生の意義に目醒めて活動の實踐に移ることでありませう」と叫んでゐる。(三行目福岡縣とあるは佐賀縣の誤り眞生子)



大阪支部

九月十五日夜、春尾龜次郎氏宅、家庭眞生會——曾我尾氏、感想として、宗教の活動的方面を簡説、土屋御道先生の座談的な法話あり、記念すべき滿洲國承認問題より説き初めて、眞に生きがいある人生について極めて平易にお話しあり、後茶菓子を頂きながら、「店員を叱る」といふことが話の中心となり、主人側、土屋先生其他、來客等の感想あり、店員諸氏から意見が出なかつたが、こういふ會では、主従一味となつて遠慮のない所を語る程になる事を望んでやまない。

九月十六日 豊田氏宅、眞生論談會、野田三郎氏最近再び大阪に來住、久し振りで出席、片岡憲三氏吳より歸京の途出席、岐阜の古賀清一郎氏も講演の爲來阪中にて出席、各主要支部員を交へて盛會、土屋先生立つて日本の前途を憂へて青年の自覺を力説、四十分間の短講は甚

だ効果的に思つた、座談會にうつる、米田傳司氏司會者、キミガヲ寫眞館主土屋修氏現在自分は非常な法悦に浴して居る。滿座の心をつかんで唐澤山修養會以來の入信の経路を語り、ついで同氏の原稿批判會さなる、土屋アといふ所、次に土屋先生から大阪の連中に、議論となつたら何處へ出してもひげをさらぬが念佛がこれにこそなわぬと痛い所を一と刺し頂戴、禮拜儀を我がものとするか、力と法則と恵みをわがものとする事について各氏より感想あり、不相變閉會間時を突破す。

九月十八日午後一時より芦屋の今永氏宅家庭眞生會。

同日午後七時大物園平寺にて眞生講演會神谷學周氏の感想に初まり、西藤兼子女史の。他力信仰を中心としたる論語の解説、甚だ傾聴に價值あるものあり、次に土屋先生の「帝國の將來と國民の覺悟」と題する獅子吼あり甚だ盛會、座談會となつて一人の青年求道者の質問あり、しかも念佛の直截簡明に及ぶもの無きを理解され、次の日曜には吾等念佛を約せ

御清崎支部

御清水修養會眞生同盟相崎支部唯一の年中行事たる秋の修養會は、例に依り御清水に於て、九月廿五日より廿九日迄五日間眞剣に行れた。登山参加せる者總數六拾名、五日間連続の熱心者三十名、以てその盛會を知るべしである。

場所は北陸隨一の名勝舊跡、風光絶景しかも海拔幾百尺といふ靈山、指導者は、土屋先生、條件全く備りたる近來になき充實したる修養會であつた。

五日間の修養會、それは夢の間に過ぎた。餘りにも短かつた。しかしここに各の得たる、或るものは、決して僅少ではなかつた。永遠の生命を育む、眞の魂の洗練眞の力の蓄積である。亦或る者にこつて、更生であり、救いである。山を下る氣持ち、それは生涯忘れ難いものである。この充實したる熱心力、活動の源泉こそ、來る可き活社會に向上の道を進む原動力であり。かくてこそ修養會、意義もあり、主張も生されるのである。思へば、如來の恩寵の深きを今更の如

く感じる。開會以來、一人の缺けたるもなく、事故無く、一切が、一體となつて全體の爲に念佛を中心として精進した。天候も恵まれた。夜は雨晝は晴れ、殊に風光明媚の御清水の靈山は素張しいものだ。展望臺に登つて、四邊を見る、日本海の夕陽の莊嚴に思はず、合掌念佛する、越後平野を眼下左右に見下し、佐渡ヶ島を指呼のうちに納めて、はるか妙高アルプスの連山を望む、鏡の如き、日本海を紅に染めて、西に沈む、雄大な太陽の美しさ。其處に眞理を説き、美に憧れ、善にくみする者の集ひ、私は、ここに人々大自然に融合の極致を見た。

第五日 ○座談茶話會 眞光寺に於て開會、出席五十名。會員各自の感想、將來の發展策の協議等。

最後に御清水の大泉寺の御方々の利害を離れて、心からなる御同情さ、役割の方々の御奉仕を感謝します。

阪阜支部倍通

九月十二日、土屋先生をお迎へ致し午後五時より長良川畔御獵鶴飼事務所に於て例會を開きました、會するもの二十名。

今回の集りは廣く公開せず主として、奮くから極く御實態にせられつゝあります方々の中にも種々の都合により落付いて親しく先生の御話を承られます機会が少なく、何さなく物淋しさを感ずる様子の心持も致して居りましたので、此の氣持を満たす事も將來同盟發展上に必要かと思ひほんの親身の懇話的の會合に致した譯であります。久方振りに親子水入らずの親しみを覚え、心から打解けたよいつ感じの内に先生の心の奥底よりの慈愛に満ち／＼たしかも、宇宙の何物をも焼き盡さずにおかぬ如き熱烈味を含みましたお話しを二時間に亘り承り後懇話に移り十一時過ぎ法悦の内に會を開きました。

序に舟添へますが會場は鶴匠頭山下氏の別邸を伊藤花子様のお骨折りに依り特に本同盟の爲めに使用方快諾せられ又山下氏の寶姉が心より道友を歓迎せられたので非常に仕合せを致しました。又場所の自慢も一寸おかしなが長良の清流にさしかゝつた岩上にはぼんきに晴やかに建てられその對岸には滴るばかりの深緑

の有名な金華山そびえ立ち誠に眺めよき暑さ知らずの結構な場所であります。その上山下氏が道友の爲め特に鶴飼を觀覽せしむる爲め御努力せられました御心添へは特に感謝いたす所であります。

古賀幹事は今回大阪の道友土屋修氏の斜旋に依り左の日割で巡演されました。九月十五日より十日初旬に亘り大阪生野中學、扇町高業、西華女學校鶴飼第五小學校、東平野第二小學校、東洋紡織、同三軒屋工場、西成工場、四國小松島工場、今治工場、中國廣島工場、富士瓦斬紡織工場等。各地の同友に同氏の御援助使用をお願ひ致します。(眞生子)

各地の道友には御變りも在りませぬか此の夏以來何だか多くの人々にお會しないうやうな氣してお會したくてなりました。

唐澤の集り以來各地の道友には非常な勢いでその道の發展策に全力を注いで下さる道友のあることをここに道友と共に感謝いたします。

就中、眞生誌への改造は最も目ざまし

□ 抄 挨

合掌同盟の事務處理の必要上御命令に從ひ、今般私儀假りに主事の職につく事になりました。固より不適任は明白であります。固より不適任は明白御許下さい一寸御挨拶申上ります。

十月三日 片岡 憲三
眞生同盟會員 各位

■ 山本きぬる様より

(前略)……いつもだらしな私に尊い御導きに對しても、煮え切らないで眞實に先生に對して申譯もございませんで、私も悲しうございませう。……(中略)……でも先生少しづつは自分の進む路がはつきりして来る事と思へば少しは開いて来るので御座いませう、兎が眼を覺して、しまつたと思つた様に遅れ走せ乍ら自分の失敗によつて又路が少しは開けて行く様に思はれます。歸宅いたしました翌日から近所の姫さんが裁縫見習ひに三人來られます。只これ丈の中にも今迄とは心の眞剣味が違ふと思ひます。自分の仕事に對し若し人達に對し、爰に對してもお

以上己に三昧會に参加した人のみにして下さい。

□ 丁度氣候もよし、又場處もよい處です。から、全力をあげれば五日間以上の効果はあがるものと確信して居ります。人数は少数でもよいから今度丈は特に熱心な方のみに願ひます。

□ 殊に今回は私も思ふ存分に宗教の批判をいたしますから、同志以外の人には御参加を御断りしたいと思ひます。それはそれらの人達に誤解して頂いては御本人の爲めにも又會の爲めにも反つてよくないと思ふからであります。此の點特に道友の方々に御注意おきを願ひます。

□ 然し決してかくして我ま、な話や我田引水を仕やうと云ふのではありませぬ。信仰の一致しない人や反對の氣分ある人の中ではそれらの人の誤解を恐れる爲めに、眞にくつろいで話すことのできぬ場合が多いからであります。

□ 願くは僅に三日間ありますから、念佛もし、お話し、お互に心情を暖めて、専心道友の親交をかわりたいと思ふものであります。(十月十五日)

いものがあります。十何年もの間關係してゐた私でさへ仲々思ふやうには行かぬのですから、どうかそのへんの努力は皆様に買つて下さい。悪評だらけなら誰でもするさ云ふが、その實質めるだけなら誰れでもします。少々氣に障つても改善のできるやう御批評やら御指導を願ひます。

□ 去る四日道友山崎作藏氏が他界せられました。道友の中には多分御存じの方も多しと思ひます。十數年來の友として、心の正直な人でしたが、それだけ念佛に對しても非常に美しいものがありました。したのに、今になつて氏を失ふことは私にさつては可なりにつらいことでありました。何れ折しもあらば氏のことについてはまた更めて書いて見たいと思ひます。が今は之にて筆を止めます。

□ 来る十一月三、四、五日の三日間名古屋會場として全國同盟の秋期大會を開くさ云ふことになりました。今度は主として眞生運動についての根本中心の問題のみを一同と相談したく其の準備にせりかゝつてゐます。各地の道友も願くは一回

念佛の動機が深められます。

これを思へば複雑した生活をして居る人程一層幸福であるべきだと思ひます。何程の力もない私ではございませうが、若い人達もこれからは活動寫眞などへ行くのは止めてお詣りに連れて行つて下さいなと申されて居ります。此の若い人達の生命こそ尊ぶございませう。此の人達が一日も早く先生の御指導にあづかれる日が来る事を心から命じて止みませぬ。

先生、今のところはさても攝婆に支部を立てる事は望めないかと存じます。山村様と二人ではいくらキバツても駄目です。すげこの邊地にもいつかは夜明けの時が来る事ではございませう。私などではかき立て頂ける様な御用がございませう。何なりと仰せ付け下さいませ、名古屋の御婦人方にも負けない様攝婆も女で！と思つて居ります。でもいつ芽を吹く事ではございませう。(以下略)

■ 谷年泰様より

(略)唐澤では誠に有難うございませう。一度は一度毎に勵まされてわからぬ中からも精一杯やり度い心を湧き立てて居り

誌代寄贈並拂込者御芳名

きす。然し行基寺、唐澤、共に念佛申させて頂く時間がありませんでした爲、幹部講習會といふやうな特別の小数の有力な同志のみのお別時をセヒやつて頂きたいと思ひ願ひして居ります。やつぱり一年に一度や二度はミツシリとお念佛申し、又ヒシ／＼と教えて頂ければ、唐澤や行基寺だけでは、事務家や事業家になつて了ひそうではいけません。(以下略)

- 壹圓宛 東京 小尾英一様、矢崎さし様、石山清吉様、浦賀 小川廣雄様、竹内倉吉様、正義寺様、三重 田川金彌様、大須賀正義様、京都 飯命院様、學母鈴木銀作様、長野 今井三造様、愛知桑田駒吉様、岐阜 圓心寺様
- 壹圓貳拾錢 仁川 小谷益次郎様、○ 貳圓宛 藤枝町 神尾承眞様、岐阜 小林かゝる様、浦賀 黒岡仁太郎様、柏崎 後藤泰次様、彦根 竹村よゑ様、○ 拾圓 名古屋 渡部善兵衛様、

編輯後記

△頁数の少い割合に、色々の掲載しなくてはならないことが多くて今月號もバラ／＼の感して編輯終らなければなりません。△來月からはもう少し發行を早やめて廿日と致したいと思ひますので、原稿を十日／＼切と致します。

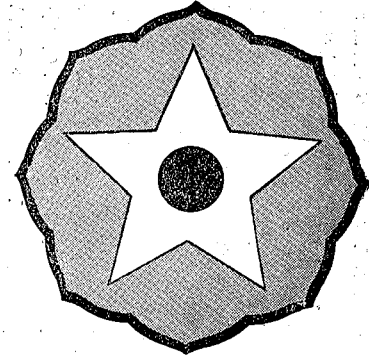
辨榮上人の十三回

△十二月號は辨榮上人記念號として、忌を意味した記念號に致したいと思ひますので上人の人格、宗教、記憶、逸話等至急御投稿願ひたいと思ひます。

「眞生」原稿
締切——毎月廿日
送り先——
東京市京橋區入舟町二ノ三ノ一
谷口 虚空

大正十四年八月三十日 第三種郵便物 認可
 昭和七年十月廿日 印刷
 昭和七年十一月一日 發行

Shinsei



眞生マケ

□私は近頃佛教の理想を追究して、遂に浄土教に歸したものでありますが、而もその理想が我國の建國の理想と甚だ一致するものあるに一驚を來してゐるものであります。

□就中、我が國の國體は君民一體の理想國であります、天皇を中心とする大和民族の發展は天孫降臨の時に於ける其の神勅の中に之を見ることのできるものであります。

□即ち天孫瓊々尊は此の神勅を奉じて此の土に降臨し給ひ、國民と協力一致して、此の土を開き給ふたのであつて、大和民族は其の建國の初めから君民一體であつたのであります。

□之は全く他國に其の類を見ない建國の史實であります、天皇の御心には民安かれと思召す外には全く別に何も在らせられ無つたのであります。

□而も此の事は浄土教に於ける阿彌陀佛國と其性を同じうするものであつて、如來の大悲と天皇の御心とは其間寸毫の相違もないのであり升。

□否、それどころか、佛教の理想が遂に浄土教に至つて完成したものとするならば寧ろ此の理想を此の土に實現したものは我が帝國であると云つて差支へないのであります。

□然り然らば此の浄土教を信する私共の前途は我が此の國土を通じて淨佛國土、成就衆生の實踐に立つのが眞生主義の運動でなくてはなりません。(念)

發行所

眞生社

東京芝公園四十四番地九番
 芝東八八二番
 電話一六一〇

發行所
 編輯人
 東京市芝公園十四號地九番
 土屋 觀 道

東京市澁谷區中通 二ノ四二
 印刷所 副島 慎夫
 丹丘舎印刷所
 電話青山七五番

本誌定價 一部 十 錢(郵税共)
 半年 六十 錢(同)
 一年 一圓(同)